

英国の外国語教育について

市橋 弘道

筆者は昭和五十九年四月から九月末まで英国で研修する機会を与えられた。その好機を利用して、英国の学校教育——初等・中等・高等——とそれ以外の教育——継続教育・成人教育——とにおける外国語（古典語を含む）教育の現状を調査した。そのうち中等教育については、滞在したエセックス州コルチエスターを中心とした地域の十八校（総合学校（comprehensive school）十六校とグラマー・スクール二校）について調査し、その結果を『英文学会報』（大谷大学英文学会）第十二号（一九八五年）に発表した。しかしその調査では、同じく中等教育の場であるペブリック・スクールを取り上げることができなかった。そこで本稿においてはペブリック・スクールにおける外国語教育の現状を見ることにする。もともとペブリック・スクールといっても、その数も多く内容も様ではないので、ここではその代表的なものと思われるイートン校（Eton College）を取り扱うことにする。

さて、イートン校の外国語教育について語ろうとすると、入学試験から語り始めなければならない。というのもこの試験にすでに外国語が課せられているからである。その外国語は、フランス語とラテン語で、これらは全員受験しなければならない。この他にギリシャ語が選択科目としてではあるが出題される。このようにイートン校の生徒は、これらの言語について初歩的で基礎的な

知識と技能とを入学時にもっているのである。

では次に入学後の状況を学年を追って順次みていくことにしよう。ところでイートン校では、学年は第一学年のFから最終学年のAまでの六つに分けられている。ちなみに、一学年二五〇名、一クラスは二十五名、授業時間は一回が四十分、一週間の時間は秋・冬学期では三十五時間、夏学期では三十一時間である。

さて第一学年ではどうか。まずフランス語についてみると、これは一週間に四時間の授業とある。この学年での授業は、聴くことに重点が置かれる。それとともに口頭練習にも多くの時間が費やされる。ランゲージ・ラボラトリーも活用される。このような音声面の訓練と同時に、簡単ではあるがしかし正確さを要求される作文の授業も行なわれる。次にラテン語であるが、これは単独の授業としてではなくクラシックス（classics）という名の科目の中で扱われる。この科目にはラテン語の他に英語、歴史、神学が含まれている。この授業は一週間に十時間ある。ここでのラテン語は、簡単な文章の読解に重点が置かれている。もちろん文法も教授されるが、文法のための文法という授業ではない。教材には、学習の遅れている生徒たちのクラスでビデオ教材のCambridge Latin Courseが使用されている。次に、ギリシャ語は一週間に四時間ある。ただしこれは随意科目であって、これを履習しない場合は先述のクラシックスを十二時間受ければならない。第一学年では現代語の第二外国語の授業はない。

第二学年においてはどうかであろうか。先ずフランス語であるが、これは週当り一時間増えて五時間（夏学期は四時間）になる。口頭練習や聴き取り練習は続けられるが、それらとのバランスは十分に考慮されながら、読解に比重が少しずつ移される。次にラテ

ン語はどうであろうか。これは第一学年と少し異なつて、生徒は、第一学年のクラシックスの延長であるジュネラル・クラシックス (General classics) のクラスとラテン語だけのクラスとの二つのストリーム (stream) に分けられる。しかし授業内容は両クラスともそれぞれの科目の〇レベルに対応するものである。教材にはキケロ、ヴァージル、エラスムスなどの作品が用いられる。一週間に五時間配当されてゐる。ギリシヤ語は一週当り四時間で、読解が中心となる。入学後初めてこれを学んだ生徒や学習が遅れている生徒はアテナーゼ (Athenaze) を、他の生徒はツキディデス、エウリピデス、アリストファネスなどを読む。〇レベル合格を目標に文法にも力が入られる。ギリシヤ語を履習しない生徒は他の科目を選び週二時間学ぶわけであるが、その十科目ある選択科目のなかにドイツ語とスペイン語とがある。現代語の第二外国語の学習がこの学年から始まるのである。ところでこの学年の夏学期の終りに、生徒全員がジュネラル・クラシックスあるいはラテン語とフランス語との〇レベルを受験する。

第三学年は、次の第四学年から始まる専門的学習への橋渡しのような意味をもつていて、重要な学年である。第二学年の終りに教師と生徒それに親も加わつて相談の場がもたれ、将来の方向、つまり、高等教育で何を専攻するか、が決められる。その決定に従つて第三学年で学習する科目が選ばれるわけである。しかし専門的学習ほどにはまだ的を絞らず、通常七科目を選び、学習する。この七科目のうち数学と歴史とは全員が履習しなければならぬ。必修科目であるが、他の五科目は選択科目で、英語や地理、物理や化学、美術や音楽、それに諸外国語などの十八科目の中から選ばれるのである。外国語にはフランス語、ドイツ語、スペイン語、

そして新たに加えられたロシア語と、ラテン語、ギリシヤ語が開講されている。これまで必修科目であったフランス語とラテン語が、この学年から選択科目になるわけである。なお一週間における時間数は一科目平均四ないし五時間と考えられる。ではそれぞれの言語についてみてみよう。先ずフランス語であるが、これは二つのコースに分かれる。一方は口頭練習や聴き取り練習といった直接意思疏通に重点を置いた、いわゆる「実用」コースであり、他方は読解を中心にした、いわゆる「教養」コースである。後者では「フランス文化の諸相」をメーン・テーマとして「印象主義」「ロアール川の城」をサブ・テーマとした授業が行なわれている。次にドイツ語、スペイン語、ロシア語についてみてみる。学習の当面の目標をこの学年の終りまでに〇レベルに合格することとしている。この目標達成には、基礎的な文法、約二千の単語、約三百の重要表現、これらに加えて、正確なアクセント、流暢さ、聴解力をも習得しなければならない。各種の視聴覚機器が活用される。次にラテン語について。次学年から始まる専門的学習に必要な学力を養成していくのであるが、将来的にはAレベル合格を目指すので、学習内容も原典をコメンタリーを参考にした読む作業が中心となる。最後にギリシヤ語であるが、〇レベル合格への準備を目標にして、ホメロスや他の散文作家が読まれる。上級者にはその上に原典読解にいっそう力点が置かれ、プラトンなどがあわせて教授される。

さて、第三学年の終りまでに〇レベルを五科目以上合格して、次の第四学年に進級する。この第四学年より卒業までの上級学年——総合学校などの第六学級に相当する——においては、生徒はスペイン語とと呼ばれ、学習する科目も主要な三科目に絞り、

それらの科目のAレベル合格を目指す。この段階では必修科目はなくすべて選択科目となるが、主要三科目として選択できる科目群の中の外国語は、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、それにラテン語とギリシャ語である。これらの科目の週当りの時間数は七ないし八時間である。これらの科目の他に、Aレベル受験を目標とはしないが、主要三科目を補う意味で履習するものとされている科目に、神学と一般研究(General Studies)とがあるが、後者には四十科目以上が含まれていて、その中にイタリア語とポルトガル語とがある。ところで、スペシャリストである二ないし三年間に三科目を専ら学習するのであるから、その内容もかなり専門的なものである。Aレベルが要求する内容をみておこう。現代語では、英語への翻訳、英語からの翻訳、外国語による作文、文学作品についての英語による批評、聴き取り、オーラル(口頭試験)であり、古典語では、文学、歴史、哲学の分野から選ばれた原典について詳細な研究、散文による作文・翻訳である。

さていよいよこのような学習の成果が問われる時が来た。生徒は、第五学年の秋学期、通常十一月にオックスフォードとケンブリッジ両大学の入学試験を受験する。そして夏学期の六月と七月とにAレベルを受験して、大半の者が卒業する。なかには最終学

年に両大学を受験する者もある。かくして、一学年二五〇名のうち三分の二が大学へ、そのうち約半数が両大学へ進学するのである。ちなみに、大学進学者は同年令者中約六%であり、Aレベル合格者は、一科目以上が十八%、三科目以上がその約半数である(一九七四―七五年)。また一九八三年の両大学への入学者はあわせて五五八五名であるから、イートン校出身者はそのうちの約二%ということになる。

さて、パブリック・スクールのイートン校における外国語教育の現状は以上のとおりである。しかし、これをもってただちにすべてのパブリック・スクールにあってはめることはできない。そうしうるには調査の対象が一枚では不十分すぎるからである。いまはただ、ここで判明した事と先述のコルチェスターでの調査から知りえた事とを重ね合わせてみると、英国の中等教育における外国語教育の現在の姿が少しづつではあるがはっきりしてきた、と言うにとどめておく。

なお、イートン校については同校が刊行した入学要項 *ETON COLLEGE 1984-1985* とカリキュラム説明書 *ETON COLLEGE: educational course 1984-1985* とに拠った。また、森嶋通夫『イギリスと日本』(岩波新書、一九七九年)を参考にした。